

ナルニア国物語

魔術師のおい

30

C・S・ルイス

土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)



第30話 この物語は終わり、
ほかのすべての物語が始まる（後編）

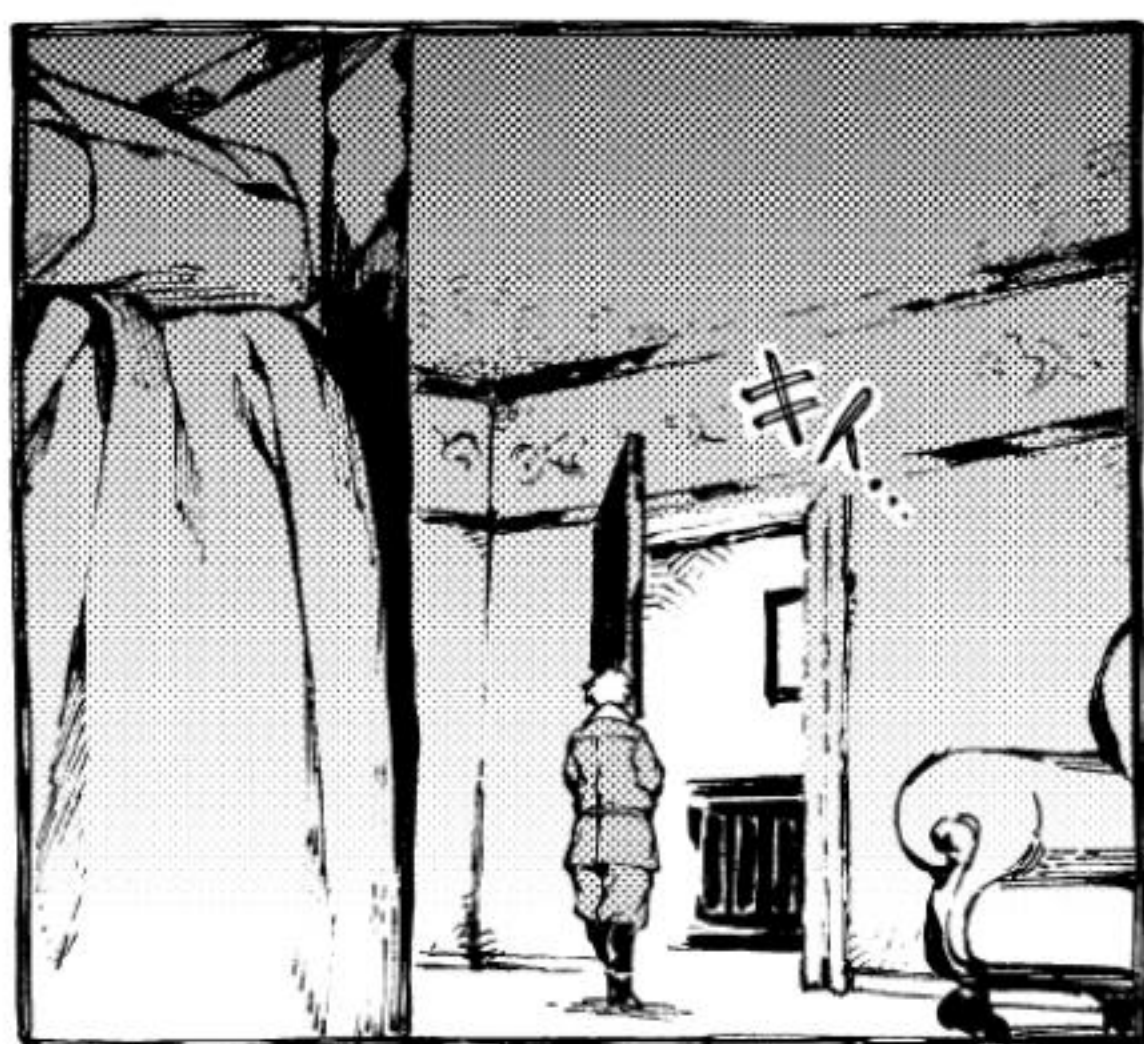










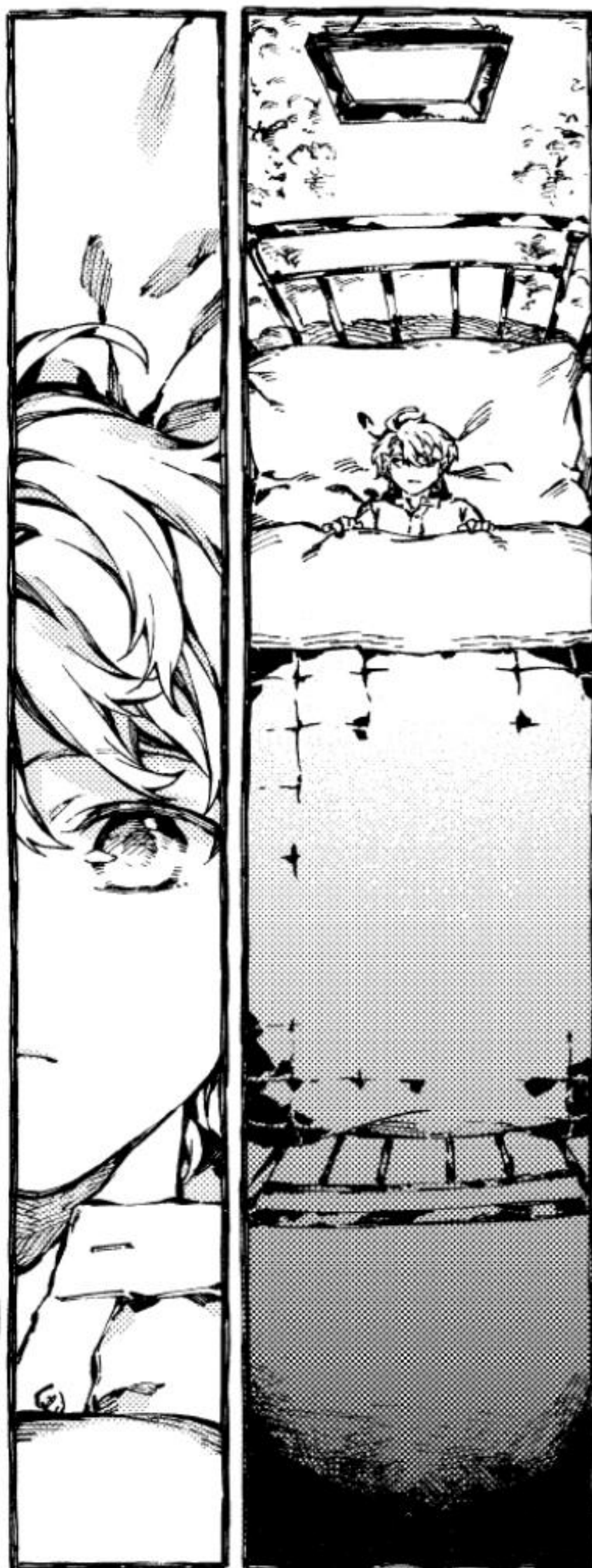




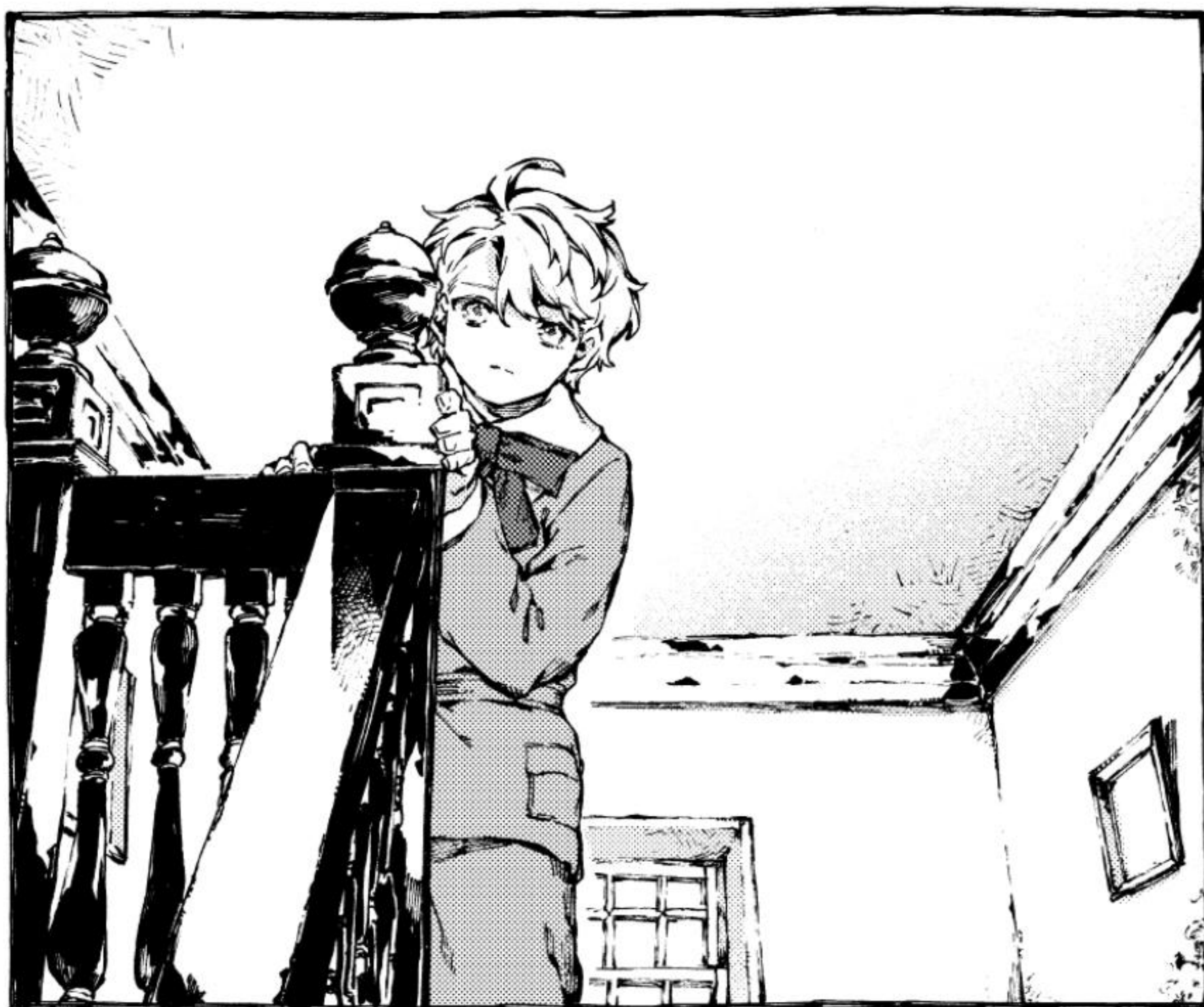




リンゴの魔法は
ほんとうに
あるのだろうか……





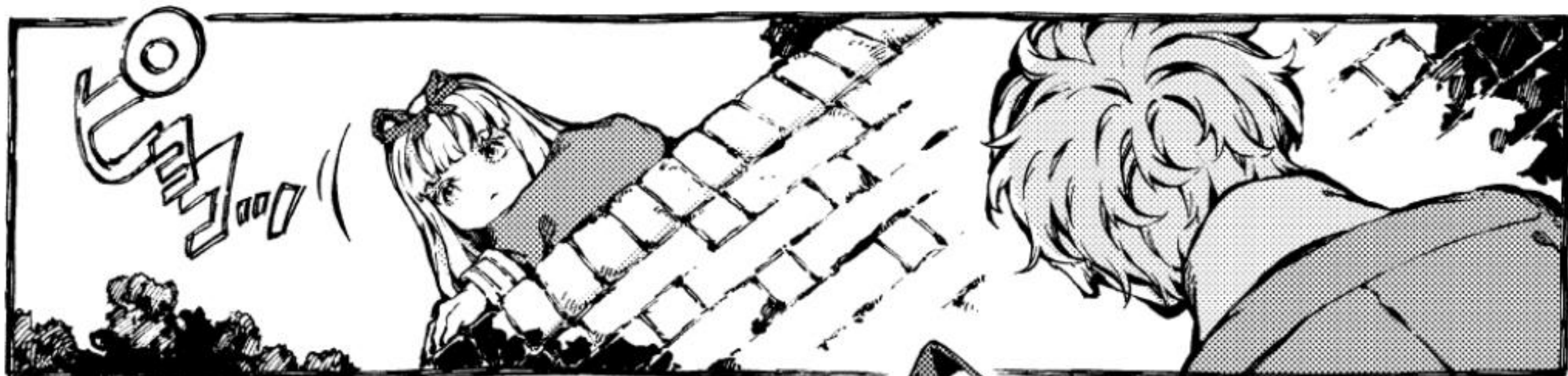


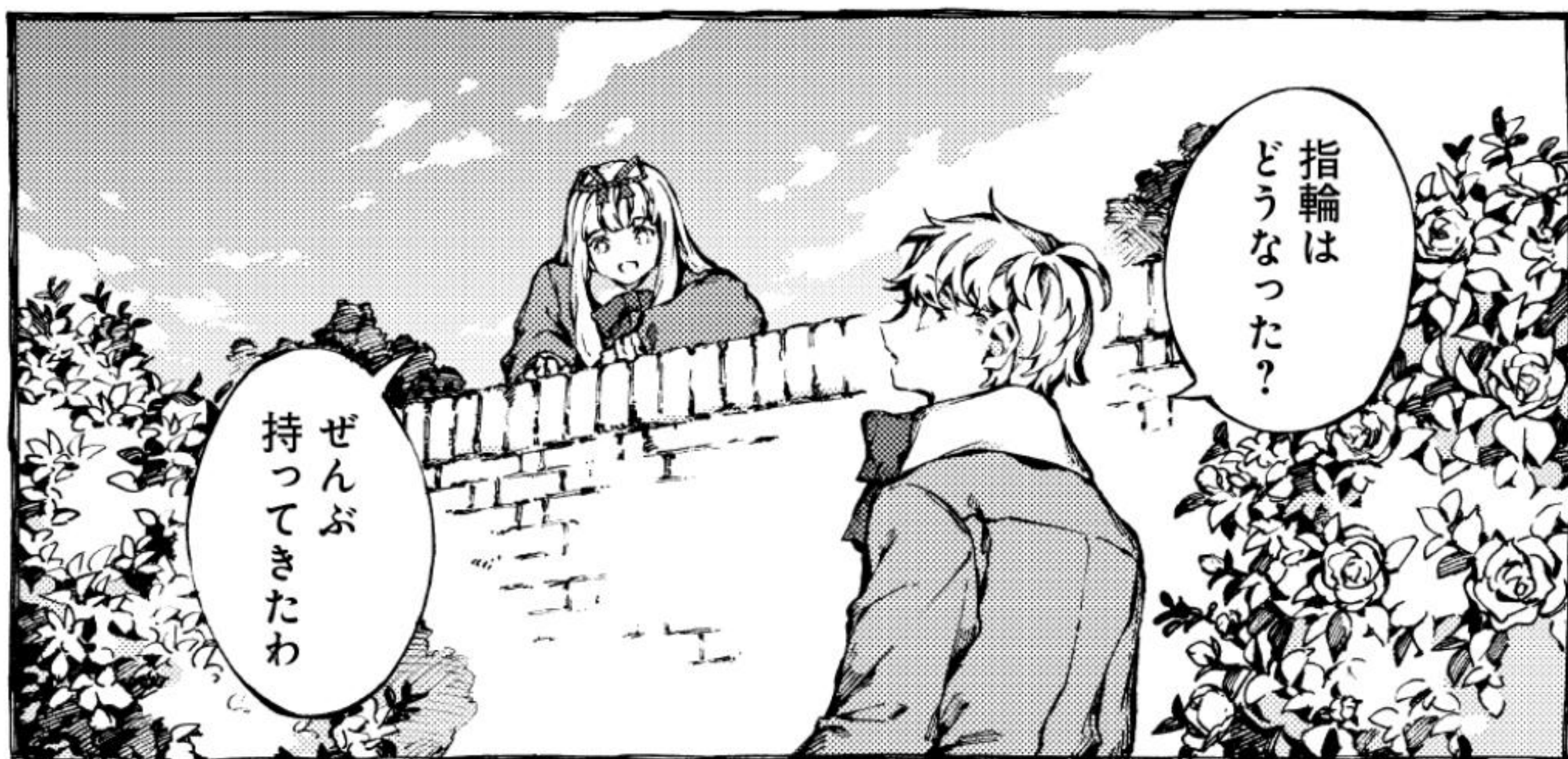
ケタリーさん

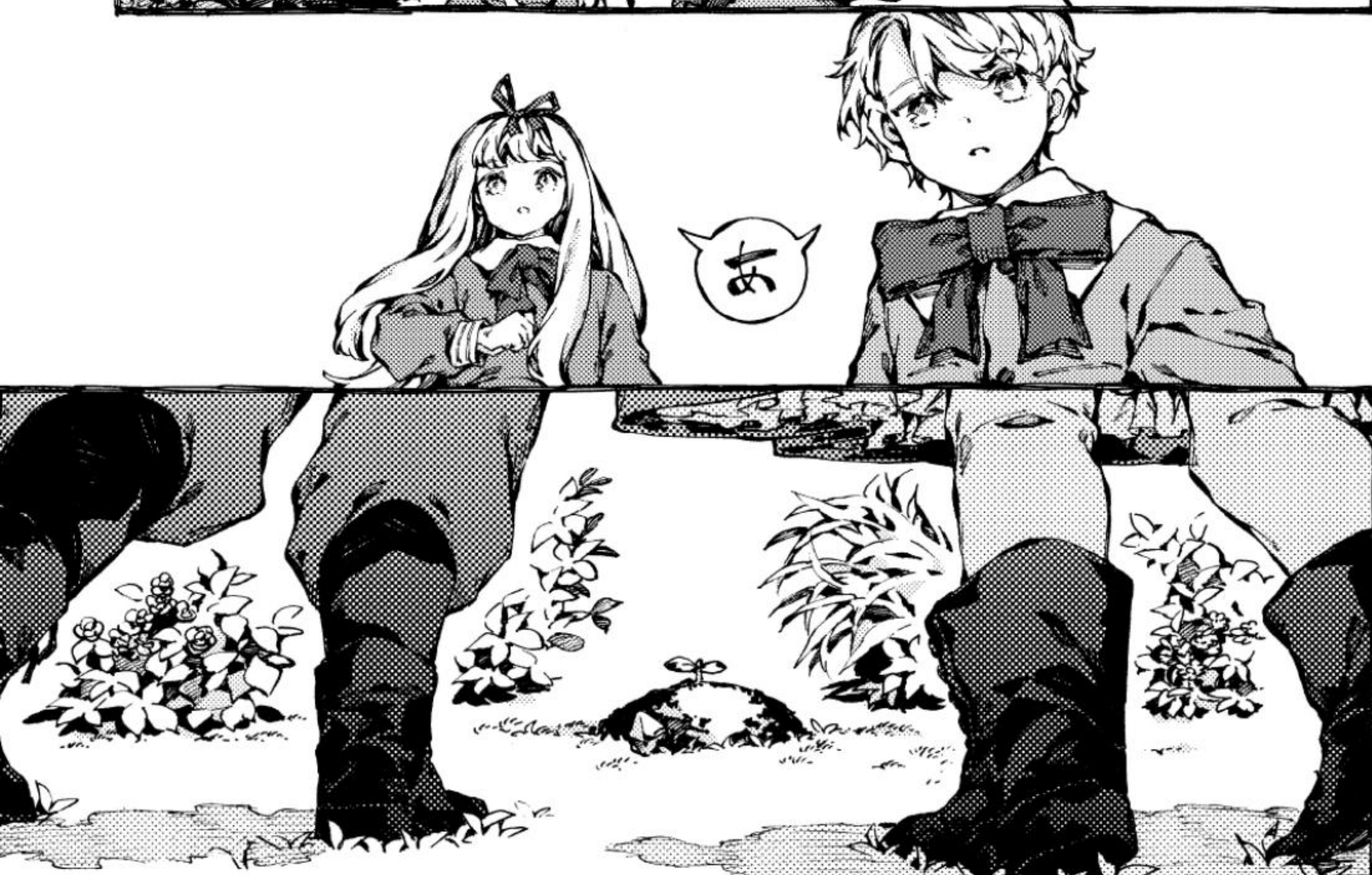


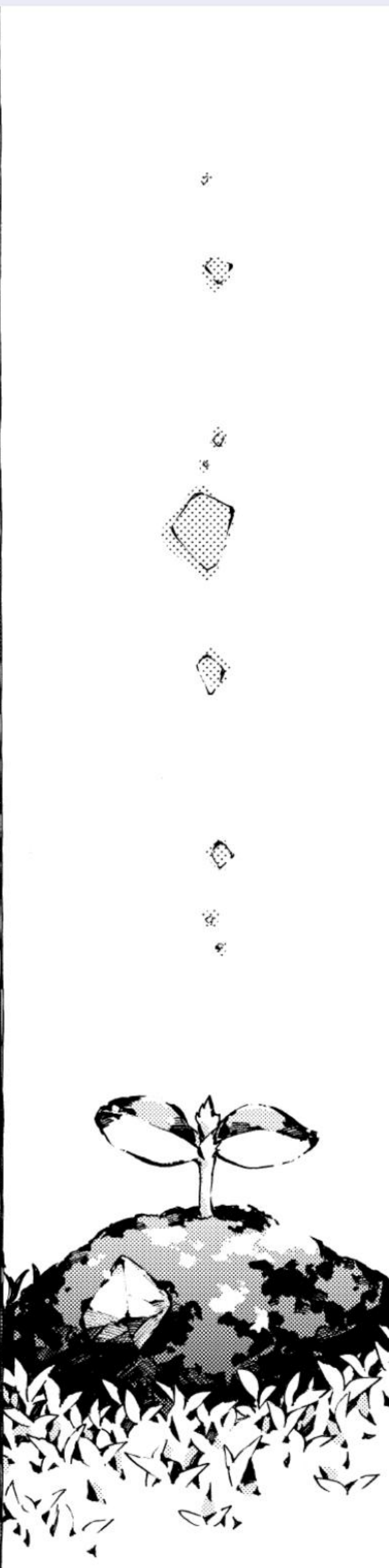
10分













—ものごとが
悪いほうへ
向かうときは

ますます
悪いことが
重なったり
するものだ

いったん
良いほうへ
向かい
はじめると

どんどん
良くなっていく
ものだ

一週間ばかり
たつと



デイゴリーのお母さんが
快方に向かっているのが
はっきりと
わかるようになった

そして
一カ月後には

家の中が
すっかり
様変わりした

二週間も
すると



庭に出て
すわって
すごせるよう
になった

レティ伯母さんは

お母さんが望むことは
何でもかなえてくれた





おいしい
料理が増え

窓は
開け放たれ

古いピアノも
調律されて

お母さんがふたたび
歌を歌うようになり

重苦しい
カーテンは引かれて
部屋の中が明るくなり

ディゴリーや
ポリーと
笑いころげて遊んだ

家のあちこちに
新しい花が
飾られ

まあまあ
メイベル



あなたときたら
三人の中で
いちばん大きな
赤ちゃんね

楽しい生活が
六週間も
続いたころ

インドにいる
お父さんから
長い手紙が届いた

それは
すばらしい
知らせだった

年老いたカーク家の
大叔父さんが
亡くなり

いまではお父さんが
大金持ちになった
という知らせだった

それで
お父さんは
仕事をやめて
インドから帰ってきて

この先はずっと
イギリスにいる
ことになるという
話だった

そして
これからは

デイゴリーが
小さいころから
さんざん話にだけは
聞いていたけれど

まだ一度も
見たことがなかった
郊外のすごく大きなお屋敷に
住むことになるのだという

ブドウ畑が
あって

森があって

厩もあって

犬舎もあって

川があって

庭園があって

温室があって

その背後には
山もあるのだ

そのお屋敷には
鎧かぶとが
たくさん残っていて

デイゴリーは

これでようやく
家族が幸せに
暮らせると安心した





ポリーは
休みのたびに

ポリーとデイゴリーは
その後もたいへん
仲の良い友だちで

しよっちゅう
田舎にある
デイゴリーの
美しい屋敷へ
泊まりに行き



乳しぼりや

パンを
焼くことや

そこで
馬に
乗ることや

泳ぐことや

木登りを
おぼえた



ナルニアでは

けものたちが
争いひとつない
歓びに満ちた
日々を送り

何百年にも
わたって

平和を乱す
ようなものは

魔女も
それ以外の敵も
あらわれなかった

フランク王と
ヘレン女王と
その子どもたちは
ナルニアで
幸せに暮らし

二番目の息子は
アーケン国の
王となった



女の子たちは
森の神や川の神と
結婚した



男の子たちは
ニンフと結婚し

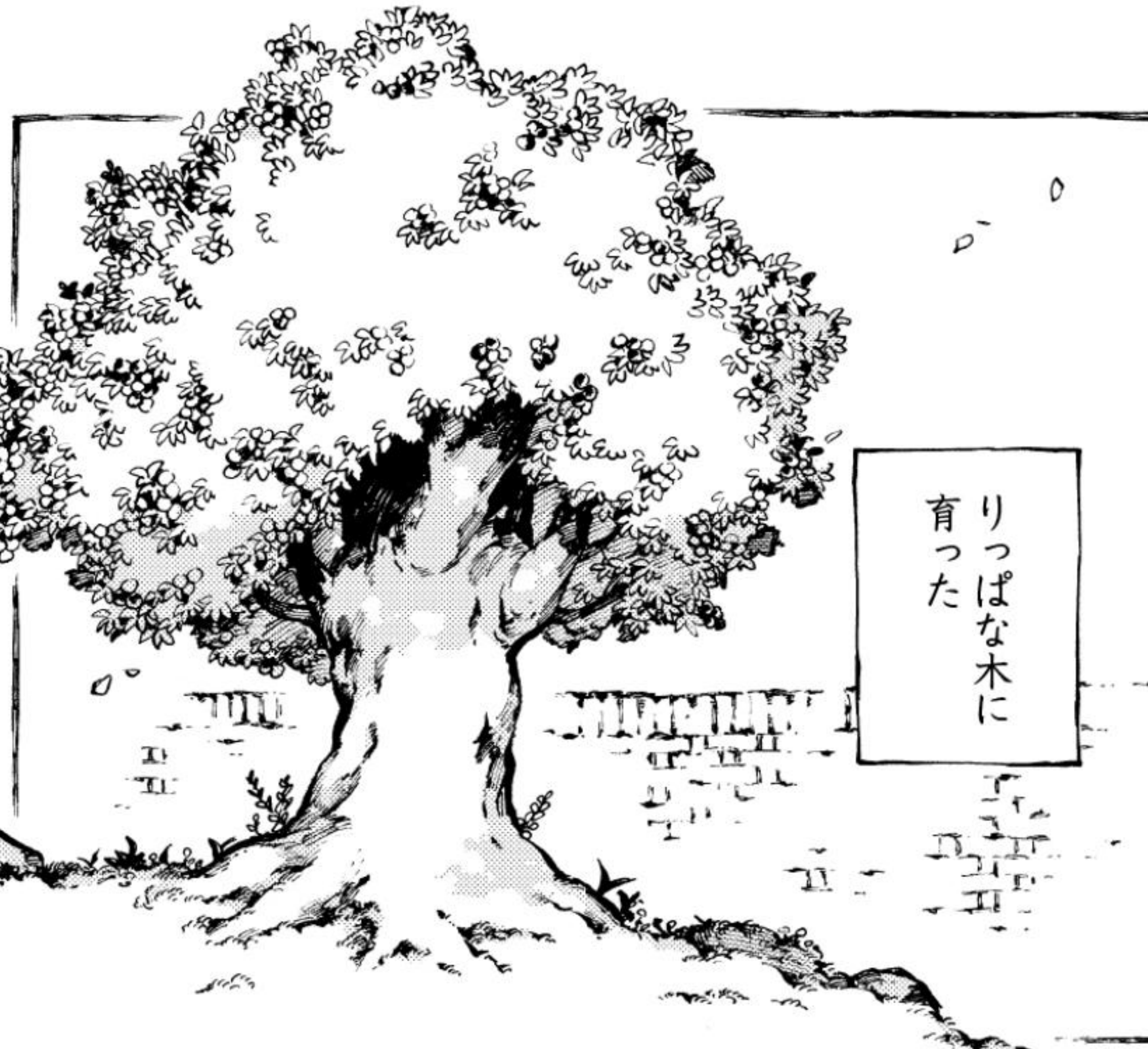


魔女が
(自分ではそうとは
知らずに)
植えた街灯は

昼も夜も
ナルニアの森を
照らし

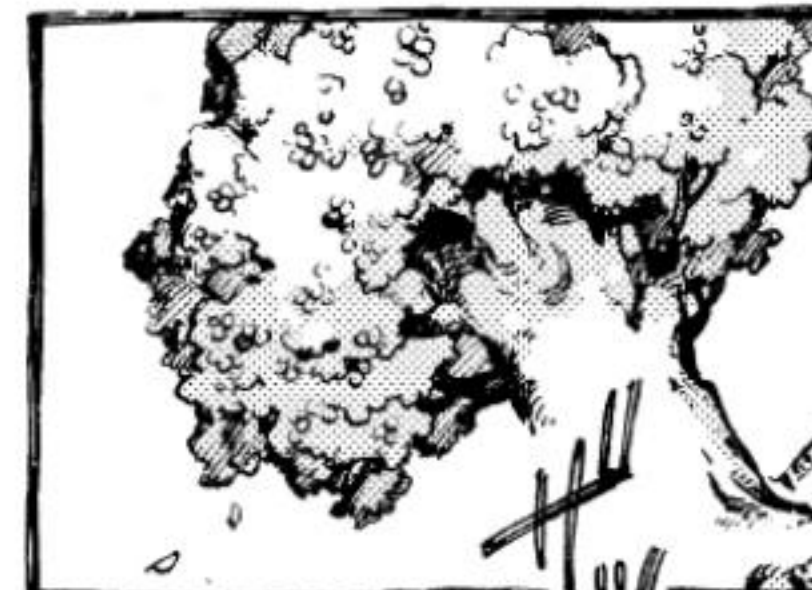


その場所は
〈街灯の荒れ地〉と
呼ばれるように
なった



デイゴリーが
裏庭に埋めた
リンゴの芯から
出た芽は

りっぱな木に
育った



そのリンゴは
わたしたちの
世界の
土で育ち



アスランの
声が届かない
遠い世界

ナルニアの
若々しい空気からは
遠く離れた世界で
育ったので



デイゴリーの母親の
ように死にそうな
病人を回復させるほど
魔力のある実を
つけることはなかった

とはいえ

その木は
イギリスのほかの
どんな木よりも
美しい実をつけたし

魔法の力こそ
ないけれど

とても
おいしい
リンゴだった

その木は
幹の奥深く

おそらく
樹液の中に

親であった
ナルニアの
リンゴの記憶を
とどめていたらしい

ときどき

風も吹いて
いないのに

いずれにしても

そんなときは
ナルニアで
強い風が吹いていて

イギリスに生えている
リンゴの木が
不思議に
揺れることがあった

のちになって

このリンゴの木が
魔法の力を
やどしていたことが
証明された

ナルニアのリンゴの木が
強い南風に揺れたり
かしいだりしているのを
感じて

イギリスに育った
リンゴの木も
枝を震わせたの
だろうと思う





デイゴリーが
中年になって

有名な学者で
大学教授

世界各地を旅する
旅行家

ケタリー家の
古いテラスハウスが
デイゴリーのものにな
ったところ



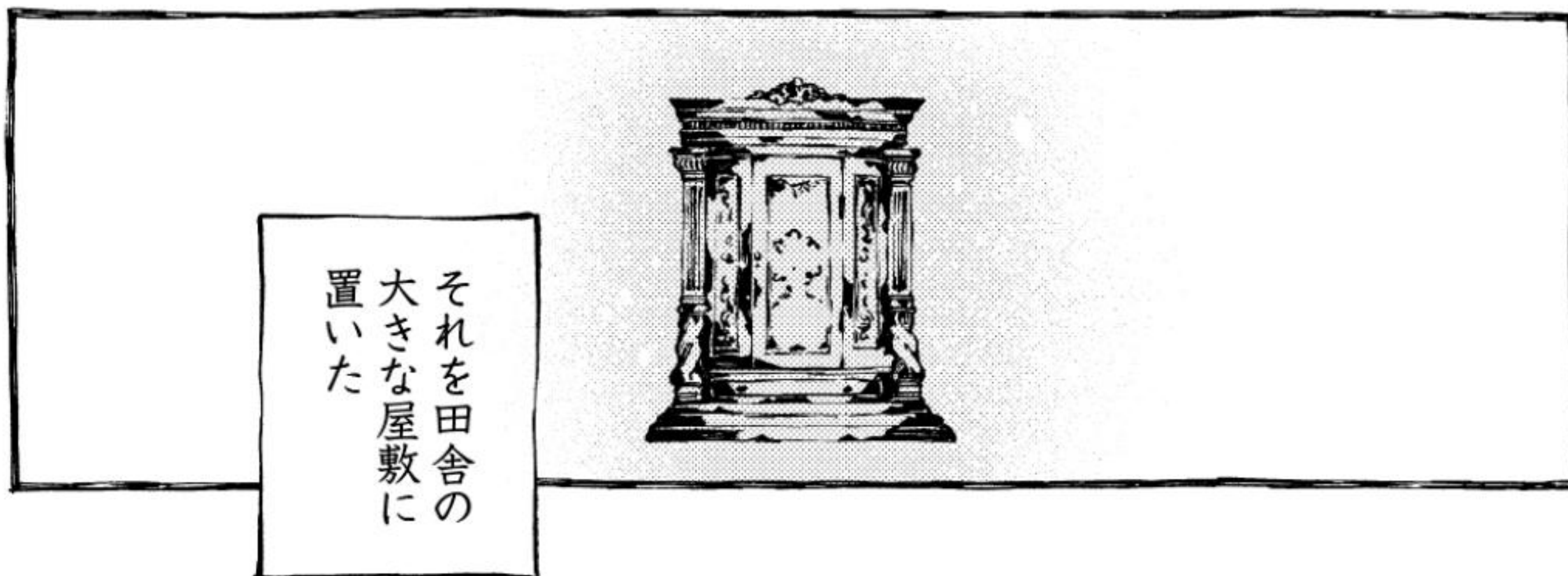
デイゴリーは
倒れた木を切り刻んで
薪にしてしまうのが
しのびなくて

材木の一部を使って
衣装だんすを作らせ



イギリス南部を
強い嵐が吹き荒れて

リンゴの木が
倒れてしまったのだ



それを田舎の
大きな屋敷に
置いた

デイゴリー自身は
その衣装だんすが持つ
魔法の力に
気づかなかったけれども

気づいた人が
ほかにいた

それが

ナルニアと
わたしたちの世界との
行き来が始まりとなった

デイゴリーたちが
郊外の大きな屋敷で
暮らすことになったとき

一家は
アンドリユー伯父も
いっしょに
連れていった



アンドリユーに
悪さをさせないように
目配りしておかないと
いけないからね

それに

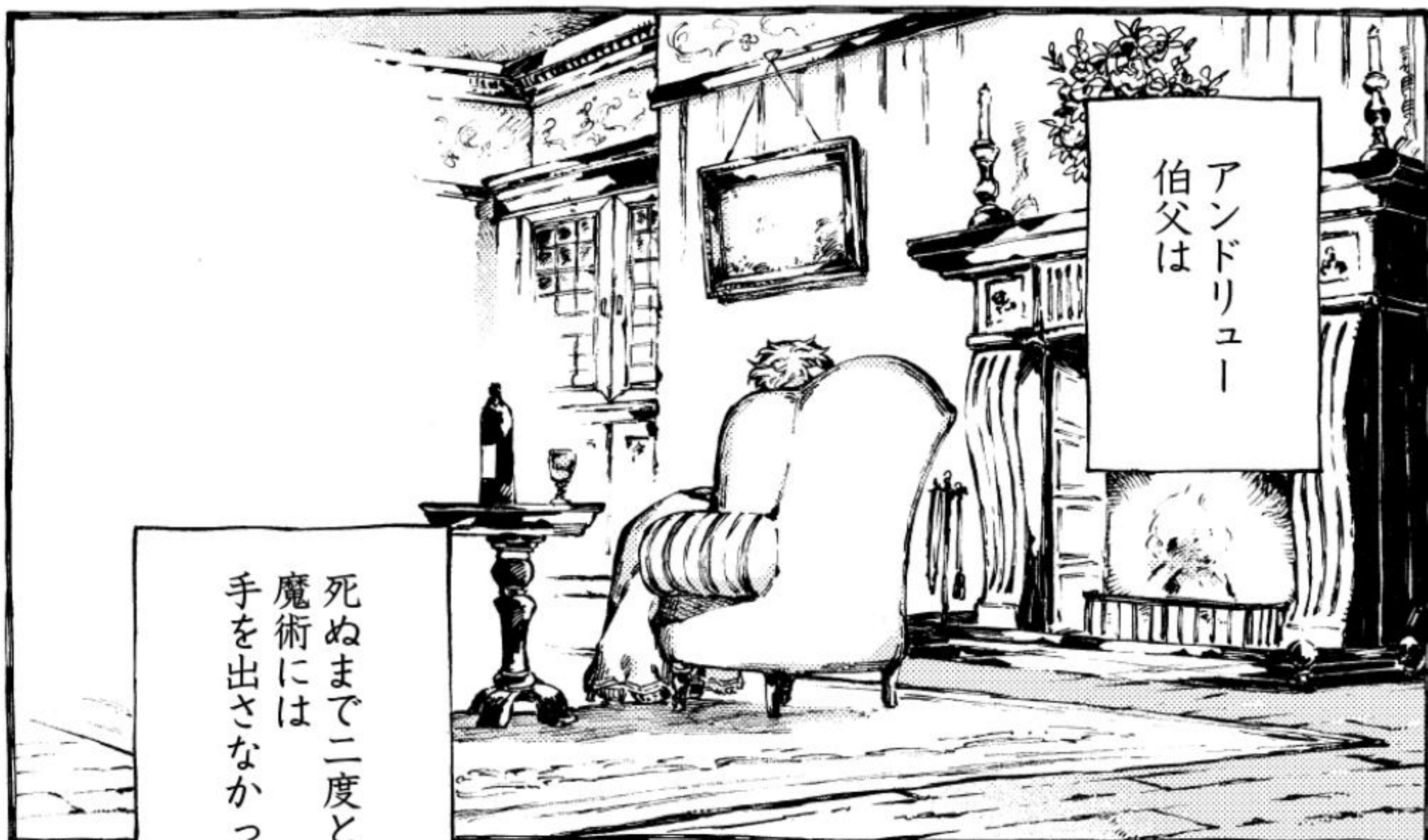
いつまでも世話を
まかせておいたのでは

レティが
気の毒だ



アンドリユー
伯父は

死ぬまで二度と
魔術には
手を出さなかった



それなりに
教訓を
学んだようで

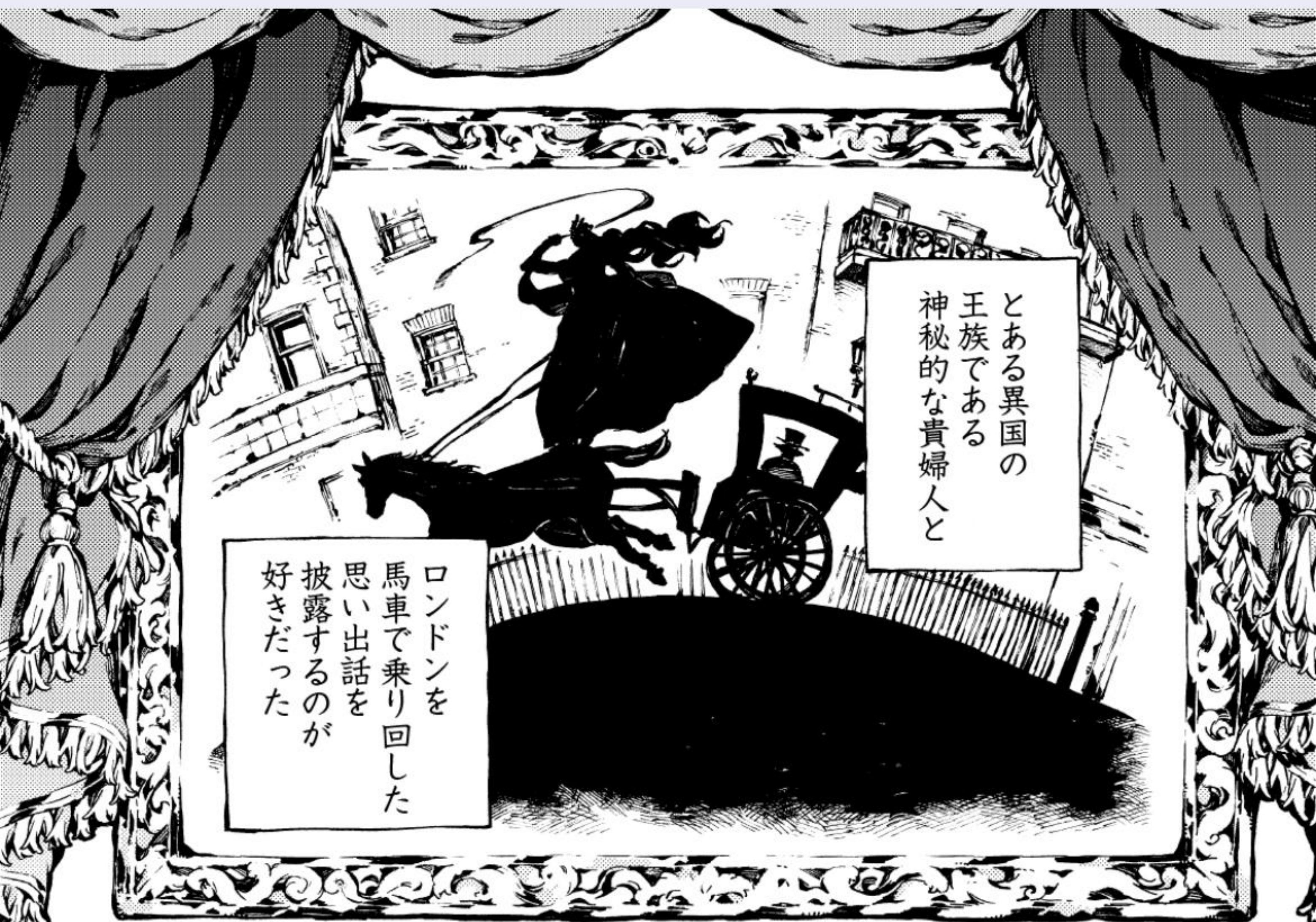
歳を取ってからは
以前にくらべたら
感じのよい老人に
なり

自己中心的な
ところも
少なくなった

アンドリユー
伯父はいつも

お客を
ビリヤード室に
招き入れて
人払いをし





とある異国の
王族である
神秘的な貴婦人と

ロンドンを
馬車で乗り回した
思ひ出話を
披露するのが
好きだった



悪魔のような
気性の
女でしたがな



おわり